

国内では、1878～1887年（明治11～20年）に掛田生糸がもっともさかんでした。

早飛脚<sup>はやびきやく</sup>※<sub>1</sub>で、横浜<sup>よこはま</sup>生糸相場の木版<sup>もくはん</sup>ずり新聞「内外生糸<sup>しんぶん ないがい きいと</sup>商況日報<sup>しょうきやうにつぱう</sup>」※<sub>2</sub>を4日で運ばせ、生糸の値段を調べました。外国の生糸商人の地図には、横浜<sup>よこはま</sup>のつぎにKAKEDA<sup>かけだ</sup>がくわしくかいてあり、掛田は日本を代表する町だったのです。

掛田の間屋は12から13けんありました。「市」の日は、全国の間屋が、蚕種業<sup>さんしゅぎやう</sup>と養蚕農家<sup>ようさんのうか</sup>をかりて店づくりをしました。

店先に屋号<sup>やごう</sup>をそめたノボりをたて、セリ師<sup>し</sup>や仲買人<sup>なかがいん</sup>で賑わいました。第一回全国蚕糸業共進会<sup>だいいっかいぜんこくさんしぎやうきやうしんかい</sup>が横浜<sup>よこはま</sup>で開かれ、1881年（明治14年）、第二回全国蚕糸業共進会<sup>だいにかい ぜんこくようしぎやうきやうしんかい</sup>は掛田村で開かれました。

有名人<sup>やまたかぼう</sup>、山高帽<sup>すがた</sup>にせびろ・ステッキ姿<sup>がいこくじん</sup>の外国人などが、遠く横浜<sup>よこはま</sup>から人力車<sup>じんりきしゃ</sup>を使ってやってきたのです。

1881年（明治14年）には全国初の養蚕を教える学校「掛田養蚕伝習所<sup>だようさんでんしゅうじょ</sup>」が開かれ、北は北海道<sup>ほっかいどう</sup>、南は九州・沖縄<sup>きゅうしゅう おきなわ</sup>からも生徒が集まり、養蚕<sup>ようさん</sup>と製糸<sup>せいし</sup>の教育を受けていきました。1889年（明治22年）には「機業伝習所<sup>きぎやうでんしゅうじょ</sup>」も開かれ、掛田は、蚕種<sup>さんしゅ</sup>・養蚕<sup>ようさん</sup>・製糸業<sup>せいしぎやう</sup>とあらゆる面で「きいとの町」として有名なところでした。

しかし、長野県<sup>ながのけん</sup>や群馬県<sup>ぐんまけん</sup>などで、どんどん機械化が進むのに対して、掛田は機械化が進まず、その後、掛田の生糸はだんだんすたれていきました。

※<sub>1</sub> 急用を遠くへ知らせたり荷物をとどけたりする仕事。

※<sub>2</sub> 商売にかんけいの多い記事をあつかったむかしの木刷りの新聞。



輸出するときの商標

